

装飾家ウジェーヌ・グラッセの装飾芸術論に関する研究
アール・ヌーヴォー装飾における「装飾家」の諸活動とその位置づけについて
Study on the Decorative Arts Theory of Decorator Eugène Grasset
The Activities and Positioning of 'Decorators' in Art Nouveau Decoration

○宮崎桃歌¹, 田所辰之助²

*Momoka Miyazaki¹, Shinnosuke Tadokoro²

This research examines the decorative theory of Eugène Grasset, a central figure in the Central Union of Decorative Arts, with a focus on the role of the 'decorator' in Art Nouveau. The aim of this research is to examine in detail the relationship between Art Nouveau decoration and architecture in an era when art and architecture were not yet separated.

1. はじめに

本文アール・ヌーヴォーは19世紀末に広く流行した装飾様式として知られているが、それ以上に多様で自覚的な運動でもあった。この運動は西欧の伝統的な芸術の枠を超え、産業・技術の発展や資本主義、各地域の社会の変化と深く結びついていた。アール・ヌーヴォーは進歩と衰退、国際主義と国家主義、エリート主義と民主主義など、時代の対立する価値観を反映し、建築や装飾芸術にまで幅広く影響を与えた^[1]。その表現は上質な手工芸品から大量生産品まで多岐にわたり、両義的で多面的な特徴を持っていたことが、当時の芸術・デザイン・社会の葛藤を体現していたといえる。

この研究では、当時建築家と近い位置に存在した「装飾家」という存在に焦点を当て、中でも日本美術の愛好家として知られるウジェーヌ・グラッセ (Eugène Grasset, 1845-1917) に着目した。フランスのアール・ヌーヴォーにおける「装飾家」が建築にとって、どのような役割を果たす存在だったかを考察することがこの研究の目的である。

2. 装飾家ウジェーヌ・グラッセ

フランス語の「装飾家(décorateur)」は、マイナー美術(arts mineurs)を扱う芸術家や職人を指す言葉として生まれた^[2]が、アール・ヌーヴォーの時代においては、室内装飾家のことを指している場合が多い。産業芸術家や装飾家と呼ばれる人々は19世紀を通じて多く見られるが、その職能についてはあまり明確でない。

産業と芸術が大きなテーマとなっていた当時のパリで、装飾芸術中央連合(Union Centrale des Arts Décoratifs)が1882年に設立される。ここで重要なのは、それまで産業芸術という名で呼ばれていたものが、装飾芸術と

称されるようになったことだ^[3]。その中心メンバーの一人がウジェーヌ・グラッセだった。スイス出身のグラッセは、今日では日本趣味のイラストレーターとして広く知られている。彼は建築家ではなかったが、美術学校での教授としての功績も大きく評価されており、彼の指導は装飾芸術の改革を進め、彼自身の実践以上にその影響力を広げる役割を果たしたとされている。

3. ヴィオレ・ル・デュクとオーエン・ジョーンズからの系譜と植物の「様式化」

グラッセの理論はヴィオレ・ル・デュクに大きく影響を受けている。彼の「最初の装飾芸術は建築である」という宣言は、ウジェーヌ・ヴィオレ＝デュックの「最初の装飾家は建築家である」^[4]という主張に倣い、装飾と建築の関係を再確認するものだった。これは、装飾が単なる建築や工芸品に付け加えられる要素ではなく、建築そのものと密接に結びついた根本的な芸術であるという見解を提示している^[5]。

また、オーウェン・ジョーンズの『装飾の文法』^[6]が代表的であるように、19世紀の芸術家たちは自然の不変の法則の探求に装飾理論の基礎をおいていた^[7]。

『装飾の文法』の最終章では、建築物の装飾こそが建築家の創造力を最もよく示すものであると主張し、装飾は建築物から切り離されてはならないと強調している。

これらの装飾と建築は、同じものではないにしても、少なくとも双子の兄弟だという言説は、芸術の統一神話を再確認しようすることに利用された。グラッセは、小芸術と大芸術の統一こそが、装飾、家具、工芸品の分野への装飾家と建築家の活動を正当化した。

グラッセの最初の装飾論『植物とその応用』(1896)^[8]

1: 日大理工・院(前)・建築 2: 日大理工・教員・建築

では、自然の様式化と単純化に基づくものだった。実用的な機能よりも装飾の造形的な価値を重視する「装飾芸術」の概念を正当化するために、「様式化」の理論を考案した。この「様式化」の理論は、装飾芸術の自律性を強調し、芸術家の創造性を高めるものであった。

4. 幾何学的な装飾への変遷

しかし、アール・ヌーヴォーの評価が陰りを見せるとすぐに、グラッセは新しい装飾理論の構築に取り掛かった。『装飾構成方法』(1905)^[9]では、幾何学の原始的な形に立ち返り、装飾家や建築家に対し、幾何学的な秩序を再考するよう促した(Fig.1)。これにより、グラッセは従来の植物的様式化から離れ、より抽象的で幾何学的な装飾へと移行した。この幾何学の優位性によって、グラッセは「植物の様式化」のシステムと、それ以前の中世合理主義との結びつきを放棄することとなっていった。ここには、合理主義のゴシック様式の流れの中で、植物的な線から幾何学的な形への移行を明確に見ることができる。

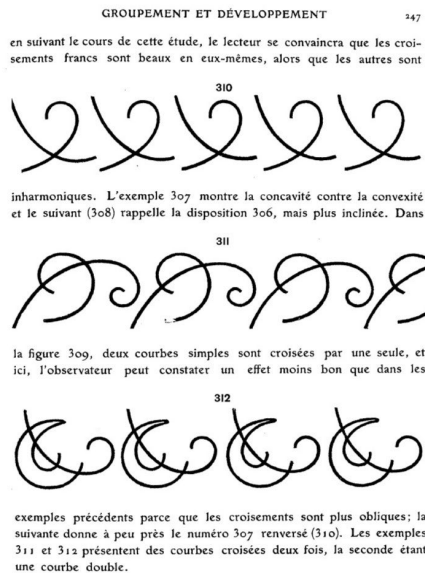


Figure 1. 『装飾構成方法』p247 (参考文献9より)

グラッセは、機械的再現に適した「様式化」を追求しながらも、その過程で装飾芸術が芸術作品としての地位を確立していくことを目指した。そのため、アール・ヌーヴォーが掲げた「芸術のための芸術」という美学的な理念は、装飾家の創造性と実用性のバランスを脅かすものとなってしまった。

グラッセの装飾理論の中心には、幾何学とその法則があり、装飾における幾何学的要素が、自然の模倣を超えて、より普遍的で数学的な美を提供するものだと考

えた。幾何学が芸術家の創造的な自由を制限するのではなく、むしろ装飾の構成を合理的に整理し、美を引き出す手段であると捉えた。彼は、自然の模倣から独立した新しい幾何学的スタイルを擁護し、これが工業生産における装飾の標準となるべきだと主張した^[10]。

5. まとめ

グラッセの理論は、装飾芸術における自然主義と機械生産の狭間で、新しい美の基準を確立しようとする試みだった。彼は、機械による生産が装飾芸術に新たな可能性をもたらす一方で、装飾が「機能」と「美」を兼ね備えるべきだと強調した。アール・ヌーヴォーが抱えるジレンマを浮き彫りにした。彼にとって装飾家は「装飾的な」産業美術の創造者でなければならなかったのである。

6. 参考文献

- [1] スティーヴン・エスクリット著、天野知香訳 『アール・ヌーヴォー』 岩波書店, 2004年
- [2] Olivier Chabet, Le décorateur et l'amateur d'art : décors intérieurs, Musée d'Orsay, 2008
- [3] 鏡 壮太郎『19世紀フランス建築装飾における装飾家および産業芸術家の役割に関する研究—彫刻家ジュール・クラッグマンの事例を通して』 日本建築学会計画系論文集, 619号, 2007.9, p.193~199.
- [4] RUPRICH-ROBERT, Victor, Revue générale de l'architecture et des travaux publics, 1862, col. 263.
- [5] Eugène Viollet-le-Duc, Entretiens sur l'architecture, Douzième entretien. Sur la construction des bâtiments, Paris, 1872,
- [6] Owen Jones, The grammar of ornament, Published by Day and Son, 1856
- [7] 鶴岡真弓「オーウェン・ジョーンズ “装飾の文法”の世界像」『比較文明』, 21号, 2006年
- [8] Grasset, Eugène, La Plante et ses Applications Ornementales, Paris, 1896
- [9] Grasset, Eugène, Méthode de composition ornementale, Librairie centrale des beaux-arts (Paris), 1907
- [10] 第3章で記した内容は、以下を参照のうえ記述したものである。Catherine Lepdor “L'art ornemental d'Eugène Grasset : l'unité rêvée des arts à l'ère industrielle”, Eugène Grasset (1845-1917), Lausanne, Musée cantonal des beaux-arts, 2011